

新技術・情報名	イチゴのベンチ栽培	推進部会名	野菜・花き
実施場所	三重県農業技術センター (園芸部)	分類	* ②

1. 成果の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

- (1) 立芯型で作業ができ、土から離れた空間栽培で土壌病害回避が可能。
- (2) 過去の成果から、1株当り収量も横行地床同等が得られる技術体系が確立され、株数増による単位面積当り生産量の増大がはかれる。
- (3) イチゴは光環境と収量の相関が高く、平面に並べられる最大限の方式として、シーソー型回転ベンチを、また経済性を考慮した固定ベンチの両方式を開発した。
- (4) 回転ベンチは常時平面とし、作業時のみ上下に移動させ通路とする。
- (5) 株間15cm、1株当り培土量は3.3斗(窒素成分量・追肥は液肥で0.8斗)が生産量の高く安定していた。
- (6) 5年連作でも土壌病害の発生はなく、収量減も認められなかった。
- (7) 光環境さえよければ、圃場条件を選ばない。

2) 技術・情報の適用効果

- (1) 作業の負荷改善がはかれ、簡易収穫車等の導入で省力化が可能。
- (2) 土壌病害を回避でき、連作が可能となる。仮に発生しても、1ペントでとどまりそれ以外の培土取りかえで対応出来る。
- (3) 横行地床100に対して、回転ベンチ189・固定ベンチ156と株数増がはかれ、それに伴い単位面積当り収量が増大する。10畝の圃場で約20畝分(回転ベンチ19.82分)のイチゴ栽培が可能となる。

3) 適用範囲

県内イチゴ栽培地域全域

4) 普及指導上の留意点

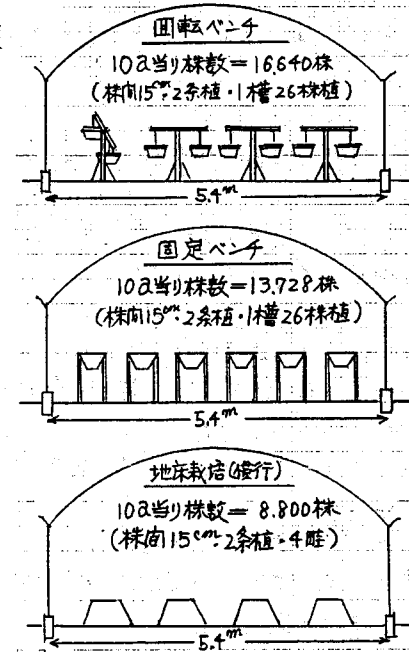
- (1) 空間栽培であり、地温の日変化も大きいので、夜の高湿管理とし、夜間保温に務める。
- (2) 回転ベンチは、作業時上下動をさせることになり、設置に当つては出来るだけ水平に留意する。

2. 具体的データ(図表)

(オ1図)

型式別栽培方式と栽植株数

(ハウス面積=向口54㎡
×長さ46㎡×4棟
=993.6㎡)



(オ1表) ベンチ型式と収量(55a)

区名	10株当り収量		10畝当り収量				10畝当り栽植株数			
	果数	重量	前期(12-3月)	後期(4-5月)	全期	10畝当り栽植株数				
回転ベンチ	184.1 [↑]	2531 [♀]	80%	3484 [♂]	183%	728 [♂]	83%	4212 [♀]	152%	16,640株
固定ベンチ	218.0	2812	89	2967	156	894	102	3861	139	13,728
地床(横行)	240.1	3158	100	1902	100	897	100	2779	100	8,800

(註) 回転ベンチの着果空間は27cm、収量は上物(可食果)79以上のもの。

3. その他特記事項

- 1) 大型施設におけるイチゴ立体栽培技術開発試験 昭和52~56年 総助
- 2) イチゴベンチ栽培技術の確立 昭和57~58年 県果